

発行人

高木ピアノサービス

六六二・〇九六一  
西宮市松下町七・四六  
電話・FAX



〇七〇八二〇二〇五五

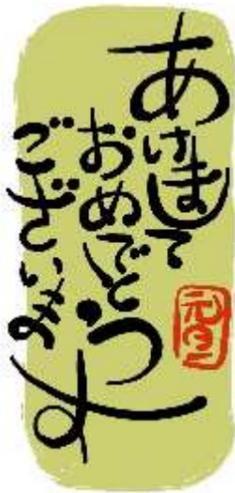
は全員が日本人。ツアーが始まり、その舞台裏や裏方として働いている人達を見て、音楽の都として歴史の深さや重みを感じさせてくれます。オペラファンやクラシックファンなら、涙流して喜びそうなのですが、何か薄暗いホールで、個人的には有名なわりには「こんなもんか?」って感じでした。それでも、初めて訪れるなら、街なかでの「ザッハトルテ」と共に、一応はこなしおきたいメニューですね。

ザッハトルテ

濃厚な味わいの特徴とするケーキで、チョコレートケーキの王様と称される。

10月28日  
今日は今回最大の目的、ペーゼンドルファーの工場見学。工場へは国鉄QBBを使って、「ヴィーナー・ノイシュタット駅」まで行って後はタクシーに乗る。高木は、街中で教会や博物館を見るよりはるかにテンションが高い。到着してタクシーから降りると建物の壁に「Bosendorfer」の文字が。「やった、ついに来た」と感じていた。

工場内をつぶさに見て回る。頭の中では、数年前、ハンブルグにあるスタインウェイの工場と比較しながら見て回っている自分があることに気が付く。この工場



今年もよろしく  
お願い致します

二〇一〇年一月



あけまして おめでとうございませう。

「高木ピアノサービス」のお客様には、このニューズレターをもって新年のご挨拶とさせていただきます。

さて、今回、毎年恒例のようになっている、海外のピアノ工場視察について記事を書いていきます。訪れたピアノメーカーは、世界3大ピアノメーカーの一つ、オーストリアの「ペーゼンドルファー」とヨーロッパでは最大の生産量を誇るチェコの「ペトロフ」です。

本来、数年前に行くつもりでしたが、諸事情があり行けませんでした。今回、ヤマハがペーゼンドルファーを買取り取り、絶対のチャンスのとなりました。

一昨年の秋、ヤマハがペーゼンドルファーを買取した。この情報を耳にしたと



ペーゼンドルファー工場前

見学で感じたことは、材料の選定から仕上がりなどは、世界一を感じさせる。「調律師として技術者としてこのピアノを扱ったみたい」と感じさせる「ピアノ」の工場見学を終え、記念写真を撮って工場をあとにする。

事件はここから始まった。ここまで乗ってきた同じタクシーを呼び、駅まで帰ろうとする。なんと、この町の繁華街まで連れてこられてしまった。「町中を見ていけ」の意味か、それとも、一般の観光客と間違われた(ま、一般の観光客だけ)か。とにかく、気持ちを入れ替えて、この町でお昼ご飯を食べる事にした。うろろろしたくないので、賑やかなところは一部だけ。結局、タクシーで降ろされた近くの、小さなレストランに入った。まだ、日替わりランチがあるとのこと。そのランチを食べることにした。

一息ついて、駅までの道の

合流することにした。(女史は関東在住)

★ペーゼンドルファー  
以下、ペーゼン

10月25日  
伊丹空港から、成田へコペ

ンハゲン経由でオーストリア ウィーンに入る。伊丹空港で飛行機に乗ったのが朝8:00で、ウィーンに着いたのが夜の9:45分。これに、7時間の時差が加わるので、ホテルに着いた頃には、もう何時間起きているのか分からないがへとへとになり就寝。



ホテル「ガブリエル」

10月26日

この日を逃すと、ウィーン市内の観光を逃すことになるので、早速、朝から街へ繰り出す。大通りを経てリング内へと向かう。いくつかの路地を抜けると突然、シュテファン大聖堂の前に出た。そう言えば、何年か前にもウィーンは来たことがあり、突然、その時の事を思い出した。確か、前回来たときにも、南側にある塔が修理の作業中だった記

りや聞こえる。しかし、まだ、終わっていないようだ。午後から博物館を見学したが、どこの国でも似たようなもの。あまり印象的なものはない。ここを出ると向かいの広場で軍隊のお祭りがあり、戦車や迫撃砲、軍用ヘリコプターなどが展示されていて、それはたいそう賑わっていた。

この日の晩は、ペーゼンの工場で働いている日本人と夕食の約束をしていたので市内の繁華街で待ち合わせをして、彼の行きつけのお店で食事をする。お店は「ホリゲ」と言っていて、ワインと家庭料理を出す居酒屋風レストラン。ここでは、ウィーンに来たならと、ウィーンのとんかつ、「ヴィーナー・シュニッツェル」を注文。前回来たときも食べたが、やっぱり、とんかつです。こうして、明後日、訪問する工場での再会を約束してお開きとなる。

10月29日  
今日はチェコへの移動日。ウィーン南駅から国鉄に乗ってプラハへと向かうが、ウィーン南駅でまたまた、落とし物を教えてあげたことから、一人の日本人女性と合流してプラハへと向かうこととなった。学生かな



シェーンブルン宮殿

と想っていたが、電車の中で事情を聞いてみると、大阪の会社に勤める20代の会社員だった。何でも、プラハからウィーンに来て、その帰りが、我々とは全く逆のコースようだ。それにしても女性一人で海外に来るなんて頼もしい女性だ。

電、バスの切符は共通で、時間券として売られている

ここ辺りでチェコらしい食事をしようと言ったことになり、それらしいレストランに入った。料理は、魚・羊・鴨肉とパドワイザー・ビールを注文した。あるチェコ人から、「チェコのビールは世界一うまい」と聞いていたので、ビールを注文した。が「ビールメニューには、パドワイザー」と書かれている。ここまで来て、「パドワイザー」を飲むか?と思いきや、アメリカのパドワイザーとは違うと言っていたので、パドワイザー・ビールとなった。

食事を済ませ、川沿いを歩きカレル橋へと向かう。お、これがカレル橋か、と思いつつ渡っていたが、橋の片側半分は工事のため閉鎖されていて、とても残念でした。橋を渡りきったところが旧市街地。ここには、夜の7時を回っているにもかかわらず、たくさん人が繰り出していた。ざっと見終えたところで、ホテルへと戻る。

10月30日  
今日は、念願のペトロフ社への訪問日。ペトロフもペーゼンドルファーと同様、いくつかの質問を持ったので、期待は高まる。ペトロフは、プラハから車で約2時間のポーランド国境に近いフラデツ・クラロ

ベにあるので、ペトロフ社から迎えに来て貰える約束をしている。約束の時間は8:30だが、時間になって現れない。ヨーロッパ時間なら30分くらいは待つつもりだが、今日まで、日本の代理店とは交渉したがペトロフ本社との交渉はしていない。「来なかったらどうしよう」と思っていた矢先にお迎えの車が到着した。運転手はペトロフ一族らしい。が、英語が話せないらしく(会話は成り立たない)、「こちらでもチェコ語は話せないし」ホテルを出発し高速度道路を走ること約2時間でペトロフ本社に到着した。ペトロフ本社を見て第一声「スパーバ」と言う。と運転手は思わず笑った。チェコは共産圏時代もあり、ロシア語も理解できるようだ。

工場内は休暇を取っている

りして、昔からの重みを感じさせてくれる。選定室に通された時、一人の日本人と出会った。京都の楽器店で働いていて、「ペーゼン」に入社することが夢だったと話してくれた。「夢は持たないかな」「夢は叶った」と素直に思った次第だった。

旧工場の見学を終えると、再び、午前中に行ったショールームへと戻ってきた。ここからは、ペーゼンの計画で、ウィーンフィルの本拠地「学友会館」のプラベートツアーに参加できることとなった。毎年1月1日に開かれるニューイヤ・コンサートの会場だ。

以前のオーナーは、銀行系の投資家だったが、それ以前にも、数回、オーナーが変わっていて、今回、ヤマハがオーナーになったことは、「ピアノを造っている会社だから好ましい事だ」と説明を受けた。ん、こういう解釈もあるのかと納得。

ショールームの見学が終わると、市内にある旧工場と本社事務所を見学することにする。この建物は、近いうちに処分されることになった。処分される前に来たこともグッドタイミングだった。工場内を見学していると、工具が展示されている。工具が展示されていたり写真が展示された

色々と説明を聞いていて、ガイドさんは学友会館の職員として、とても誇りをもって仕事をしていることがうかがえた。そして学友会館のガイドツアーも終わり、この流れでオペラハウスへと向かう。オペラハウスでもツアーを申し込んでみた。日本語のガイドを申し込んでいたので参加者



ペトロフ本社工場

者も多く、アップライトピアノの製造は殆ど止まっていたが、高木にとっては、最近、質の低下が噂される中、その材料から製造工程を見ることに大きな意義がある。どこの企業でも経営の合理化が問われ生き残りに必死だ。ペトロフも同様で5つあった工場も1つになり、従業員も二千五百人から二百人へと大きく縮小している。しかし、ピアノ造りへの情熱は失っていないようで安心した。はるばる、日本からやって来た甲斐があると言った。その後、担当者との近くのレストランで昼食を共にして帰路についた。とても満足した一日であった

その後、10月31日、チェスキー・クルムロフを堪能してコペンハーゲン経由で11月3日に帰国

本日はこの2倍くらいの記事がありますが、紙面の都合上かなりの文章をカットしました。興味がある方は直接、高木までお問い合わせ下さい。



学友会館